信を通ずる関係の発明

―「通信」断章―

（原題：前近代東アジアにおける「通信」の意味とその現代的可能性[1]）

濱田　陽（帝京大学）

はじめに

前近代における東アジア三国の文化交流を考察する手がかりとして「通信」の概念に注目したい。そして、その前近代における意味を解明し、さらに、この概念が現代においてもつ可能性についても照明を投げかけてみたい。

朝鮮通信使の研究においては、「通信」にはcommunicationやcorrespondenceの訳語としての意と異なり、「信を通わす」の意味があったことが指摘されている。しかし、この概念の意味をさらに深く理解するためには、１先行研究が示す「通信」という語の意味内容、２「通信」という語の起源と系譜、３「通信」の近代語への変容過程の三点からの分析が必要であろう。

１先行研究が示す「通信」　という語の意味内容

先行研究は、「通信」の語をどのように理解してきたのだろうか。この語に言及している記述のある著作を出版年度順に引きながらふりかえってみたい。

> …「信」に重要な意味があります。「通信」は、よしみを通わす、信頼関係を深めあうという意味でして、徳川将軍と朝鮮国王との間でよしみを通わすということです。（李進熙「朝鮮通信使とは何か」『朝鮮通信使と日本人―江戸時代の日本と朝鮮』李元植他、学生社、1992、14頁）

李進熙は、信をよしみ、あるいは、信頼関係、そして、徳川将軍と朝鮮国王の間で通わすものととらえている。

> このときいわれた通信とは、信義を通ずる、まことを通わすという意味での通信です。そういうことから、通信の関係が発達しますが、そのようにして、相互の信頼関係のうえにたった関係が開かれます。（大

[1] この原稿は、第29回国際研究集会開催時点までに筆者が調査、分析した文献・資料にもとづいている。

畑篤四郎「朝鮮通信使の歩んだ道」『朝鮮通信使と日本人―江戸時代の日本と朝鮮』李元植他、学生社、1992、51頁、54頁）

（「明治維新と「通信」関係の断絶」について）東洋の社会では信義が非常に重視されます。幕府との間の信義を重視する立場からすれば、たんに明治政府承認のための客観的な条件が整ったというだけでは、朝鮮政府としてはそう簡単に承認の切り替えに応ずるわけにはいかないという意識、あるいは心理があったかもしれません。（同、54頁）

大畑篤四郎は、信を信義、まこととしてとらえ、相互の信頼関係として説明している。この場合の相互というのは、朝鮮国王と徳川将軍のみならず、朝鮮国と徳川幕府の関係にまで広げて理解してよいだろう。

両国の善隣関係を象徴するのが徳川将軍の代がわりに来日する朝鮮通信使であった。それは、「信（よしみ）を通わす」使節の意味で十二回にのぼり…（李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』講談社学術文庫、1992、3頁）

こうして、徳川家と李王家の「信（よしみ）を通（かよわ）す」儀式はとどこおりなく終わった。残る仕事は、日本の舞楽鑑賞と朝鮮側の馬上才披露であり、文人たちの交歓である。」（同、254頁）

申維翰の記述にみるように、国書は「旧例」にのっとっていた。これで両国間の「信（よしみ）、信頼関係を通わす儀式はすべてうまくはこんだわけである。」（同、256頁）

李進熙は、ここでも信の語によしみという和語を当てている。また、それを通わす関係として、徳川家と李王家としているが、両国間に広げてもいる。徳川将軍家と李王室の関係を築くことがすなわち両国の関係を築くことでもあるという認識であろう。

仲尾宏は、「通信使」をめぐる呼称の多様性を指摘している。

「通信使」の名称については朝鮮王国差遣の正式名称でもあり、…江戸時代においては、「信使」「来聘使」ともよばれていたが周知のように初回の慶長度から寛永元年度までは「回答兼刷還使」…という使命で通信使という名は冠せられていなかった。そこで本書でも、…「朝鮮使節」とよんだり…あまり厳密な使いわけをしていない。この問題

も今後の課題のひとつであろう。（仲尾宏『朝鮮通信使と江戸時代の三都』明石書店、1993、あとがき）

このような呼称の多様性は、むしろ通信の語に特別な意味が込められていたことを示すものであろう。秀吉の朝鮮出兵以降、しばらくは、徳川幕府の使節への回答と捕虜の刷還を目的としたため朝鮮王朝は使節名称を「回答兼刷還使」としたのであるし、「信使」は通信使を縮めたもの、「来聘使」は礼物・貢物の献上におとずれた外交使節をいい、受け入れる徳川幕府側からの呼び方である。このように別の呼称と比べてみることで「通信使」の特異性がきわだつ。

次に少し長いが李御寧の解釈を見よう。韓国文化院が「92'韓国文化通信使イン・ジャパン」の文化交流事業の一つとして開催した「日韓文化フォーラム」（1992年6月）での発言である。

文化主義が入って、人がほんとうに人間らしく生きるのは武力主義ではないんだ。生きる美しい道があるんだと知った。そういうものが「通信」、ともによしみを通じる通信です。だから日本は通商しか考えない時に通信を認めた。江戸時代は必ずしも閉鎖的、鎖国だけではなかった。琉球と中国とは通商をし、日本と朝鮮とは通信をしています、という時の「信」というものは何か。心の触れ合い、価値の触れ合い、文化の触れ合いです。物を売ったり、持って来たりする貿易ではなくて、価値と人間らしく生きる美しさをお互いにわかち合う。共生する文化を貿易する。それが通信であった。500名の文化人が来て、詩を語り、美術を語る。こんな血の通った交流は世界にも類がない。

こういうすばらしい「通信」のモデルを持ちながら、両国はこれを生かさなかった。しかし今日、この場所で、はじめて通信が新しい時代の人間の理念になった。それが崩壊の時代に新しい息吹きになっていく。…豊かな日本になりました。しかしまだ通信をやっていない。世界中となんの通信もしていない。韓国もそうである。ですから通商のつぎには通信が来ないとだめだ。しかし日本には通信省というものがない。コミュニケーションはあることはありますが、それは郵政省ですか。（笑）これでは味気ない。ほんとうに心と心の触れ合う、世界の文化の触れ合いをする、その通信の時代が来る。（李御寧「韓国文化と日本文化－その同質性と異質性」『日韓文化論　日韓文化の同質性と異質性』在日本韓国文化院編、学生社、1994、40頁）

ここでも、まず信によしみの語があてられているが、通信を心、価値、文化の触れ合いであると解釈した上で、さらに「価値と人間らしく生きる美しさを

お互いにわかち合う。共生する文化を貿易する」ことであるとその意味内容を広げている点が目をひく。

> 「通信」とは「信(よしみ)」をかわすという意味である。雨森芳洲のいう誠信の交わりを体現したものが通信使であった。（仲尾宏『図説　朝鮮通信使の旅』辛基秀・仲尾宏編著、明石書店、2000、99頁）

仲尾宏はやはり、信によしみの和語を当て、また、通信使と交流した雨森芳洲の誠信の交わりの体現としている。もっとも、芳洲は徳川幕府側で通信使を受け入れた方であるから、芳洲の方が通信使の趣旨から影響を受け、誠信の交わりとしての外交を考えるようになったということだろう。

> 徳川幕府は対外政策として、正式な外交関係のある朝鮮と琉球を、心を通わせる国「通信の国」としたが（辛基秀『新版　朝鮮通信使往来―江戸時代260年の平和と友好』明石書店、2002、はじめに）

> 朝鮮に派遣される「日本国王使」の「回礼使」として誼(よしみ)を通わし、信義をつくして交わる通信使が五回派遣された…　（同、18頁）

辛基秀は、通信を、心を通わせる、よしみを通わす、信義をつくして交わると説明し、よしみには誼の字を当てている。また、徳川幕府が朝鮮と琉球を「通信の国」としたことに言及している。

> 江戸時代の朝鮮と日本との関係は、善隣友好の外交、親善外交であるといわれる。両政府・両国民のあいだで誼(よしみ)が結ばれ、朝鮮から日本に通信使を派遣し、日本という国家と朝鮮という国家が対等につきあっていた。（ロナルド・トビ「「平和外交」が育んだ侵略・征韓論」『日韓中の交流―ひと・モノ・文化』吉田光男編、山川出版社、2004、195頁）

ロナルド・トビも同様によしみに誼の字を当て、朝鮮と徳川の両政府・両国民の間でこの関係が結ばれたとし、善隣友好の外交として、朝鮮と日本の両国が対等につきあったとしている。

> 通信使：「信(よしみ)を通じる」という意味で、朝鮮が日本との間で「よしみを通じ、仲良くする」関係を維持しようという気持ちを表している。日本もそれに応えて通信使一行を大切にもてなした。（日韓共通歴史

教材制作チーム編『日韓共通歴史教材　朝鮮通信使―豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ』明石書店、2005、14頁）

ここでは、また信の字によしみが当てられ、仲良くする関係という点が強調されている。

このように通信の意味について先行研究が言及しているところを整理すれば次のようになるだろう。

第一に、通信を、信の字を生かして、信頼関係を通わせること、信義を通ずることとしているもの。まことを通わす、誠信の交わり、信義をつくして交わる等も、この系統に入れてよいだろう。

第二に、通信を、よしみを通わすこととして説明しているもの。他によしみを通じる、誼を通わす、誼を結ぶなどの表現が用いられている。ここでは、親しい交わりやそれによって生まれる好意などが強調されている。

第三に、通信を、心・価値・文化の触れ合い、価値と人間らしく生きる美しさをお互いにわかち合う、共生する文化の貿易として、より広げた視点でとらえているもの。

第四に、信を通ずる関係においても、朝鮮国王と徳川将軍、李王家と徳川将軍家、朝鮮政府と徳川幕府、朝鮮国と日本国、朝鮮の国民と日本の国民というように解説に幅があること。

第五に、室町時代の通信使については、通信の意と関係を説明したものが見当たらない、あるいは、江戸時代の通信使に比べてきわめて少ないこと。

このような説明の幅は、それぞれの研究者が朝鮮通信使をどのように受けとめてきたかを示しており、興味深い。これをもっぱら外交関係としてとらえるか、文化現象としてもとらえるかによって、通信に読み込む意味が変わってくる。研究者の専門とするところや研究関心によって、また、先駆的に研究成果を積み上げてきた在日の研究者、それを受けて研究に加わっていった日本人研究者、韓国の研究者、それ以外の海外の研究者によっても強調するニュアンスが微妙に異なっているように感じられる。

筆者は、いずれの視点も朝鮮通信使という歴史文化的事象を全体としてとらえるためには重要であると考える。ある意味では、いずれの見方も正しく、400年間にわたって継続されたこの事象の一面をとらえている。その前提に立った上で、あえて考察を付け加えるならば、まず、通信使という呼称を正式名称として用いた朝鮮政府の原義を明らかにし、その上で、解釈を広げていけば、見通しが明るくなるのではないかと思われる。しかし、先行研究では、通信使の名称が登場した日本の室町時代にあたる時期への言及が乏しい。秀吉の朝鮮出兵の後、回答兼刷還使という呼称が一時用いられるも、通信使が復活し、継続

されたことを思えば、通信使の理念の登場そのものについて調べてみることが必要だろう。

2「通信」という語の起源と系譜

そこで、「通信」という語の起源と系譜について考察してみたいが、これは筆者の専門外であり、かなり大雑把な作業にならざるを得ない。より専門的知識を備えた研究者の厳密な検討を待つとしておおよその見取り図を描いておきたい。また、その意味で、この原稿もサブタイトルを断章としている。

中国の正史、『史記』から『清史稿』にいたる二十五史では、通信使の文字列は『晉書』から『南史』まで６件登場する。

①新校本晉書/志/卷十三 志第三/天文下/月五星犯列舍經星變附見「江道亦不艱難，而石季龍頻年再閉關，不通信使，此復是天公憒憒，無皁白之徵也.」　其閏月乙酉，太白犯斗．占曰：「為喪，天下受爵祿.」九月，帝崩，太子立，大赦，賜爵.」
②新校本宋書/志/卷二十四 志第十四/天文二 :「歲星犯天關，占云:『關梁當・.』比來江東無他故，江道亦不艱難；而石虎頻年再閉關不通信使，此復是天公憒憒無皁白之徵也.」
③新校本梁書/列傳/卷四十六 列傳第四十/徐文盛 「文盛不許．文盛妻石氏，先在建鄴，至是，景載以還之，文盛深德景，遂密通信使，都無戰心,」
④新校本陳書/列傳/卷三十五 列傳第二十九/留異 「與王琳自鄱陽信安嶺潛通信使.」
⑤新校本南史/列傳/卷六十四 列傳第五十四/徐文盛 「文盛深德景，遂密通信使，都無戰心」
⑥新校本南史/列傳/卷八十 列傳第七十/賊臣/留異 「澌每言朝廷虛弱，異信之，恒懷兩端，與王琳潛通信使.」
（下線筆者　中央研究院漢籍電子文献WEBページによる検索）

いずれも、「不通信使」「密通信使」「潜通信使」として出てきており、ここでは「信使」が使節を意味し、それが通じないこと、密かに通じること、などの意として現れていて、通信使という使節名としては登場していないことが分かる。他方、信使だけでは、『史記』から『清史稿』まで154件登場する。

また、通信は『三国志』から『清史稿』まで30件（『元史』までの二十四史中では21件）登場している。

檢索條件: 通信, 找到 30 段
/新校本三國志/蜀書/卷三十八 蜀書八/許靖 ...
/新校本三國志/吳書/卷四十九 吳書四/士燮 子徽 弟壹 ・ 壹子匡 ...
/新校本晉書/志/卷十三 志第三/天文下/月五星犯列舍經星變附見 ...
/新校本晉書/列傳/卷四十三 列傳第十三/王戎/衍弟澄 ...
/新校本晉書/列傳/卷七十四 列傳第四十四/桓彝/謙弟脩 ...
/新校本宋書/志/卷二十四 志第十四/天文二 ...
/新校本梁書/列傳/卷七 列傳第一 /皇后/高祖丁貴嬪 ...
/新校本梁書/列傳/卷四十六 列傳第四十/徐文盛 ...
/新校本陳書/列傳/卷三十五 列傳第二十九/留異 ...
/新校本周書/列傳/卷四十一 列傳第三十三 ...
/新校本南史/列傳/卷十二 列傳第二/后妃下/武丁貴嬪 ...
/新校本南史/列傳/卷六十四 列傳第五十四/徐文盛 ...
/新校本南史/列傳/卷八十 列傳第七十/賊臣/留異 ...
/新校本舊五代史/唐書/卷六十七 唐書四十三/列傳十九/韋說 ...
/新校本舊五代史/周書/卷一百一十二 周書三/太祖本紀三/廣順二年 ...
/新校本舊五代史/列傳/卷一百三十八 外國列傳二/吐蕃 ...
/新校本新五代史/附錄/卷七十四 四夷附錄第三/吐蕃 ...
/新校本宋史/本紀/卷二十七 本紀第二十七/高宗趙構四/紹興四年 ...
/新校本宋史/列傳/卷二百六十二 列傳第二十一/李濤/弟澣 ...
/新校本宋史/列傳/卷三百三十六 列傳第九十五/司馬光 ...
/新校本元史/本紀/卷一 本紀第一 太祖/壬戌年 ...
/新校本清史稿/本紀/卷二十 本紀二十 文宗奕詝/咸豐五年 ...
/新校本清史稿/志/卷一百四十二 志一百十七 刑法一/律例 ...
/新校本清史稿/志/卷一百五十八 志一百三十三 邦交六/日本 ...
/新校本清史稿/列傳/卷二百六十二 列傳四十九/魏裔介 ...
/新校本清史稿/~/~/陳壽祺子喬樅 謝震 何治運 孫經世 柯蘅 ...
/新校本清史稿/~/~/趙文哲王日杏 汪時 孫維龍 常紀 吳鉞等 ...
/新校本清史稿/列傳/卷五百十九 列傳三百六 藩部二/烏珠穆沁 ...
/新校本清史稿/列傳/卷五百二十六 列傳三百十三 屬國一/朝鮮 ...
同前 ... (同)

ここでこれらを一つひとつ検討する準備はないが、中国の正史では、登場回数が意外に少ないことが印象的である。

さらに儒教経典十三経、すなわち『易経』『詩経』『書経』『周礼』『儀礼』『礼記』『春秋左氏伝』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』『論語』『孝経』『爾雅』『孟子』では、信が2110件、通が3101件で現れるのにもかかわらず、通信使、通信の語が登場しないことにも注目すべきであろう。十三経の中に通信という概念が展開されていないことが分かる。

そこで、中国から韓国の文献に目を転じてみよう。

新羅・高句麗・百済の歴史を記した『三国史記』(1145年成立）では通信使、通信、信使いずれの語も登場しない。信は11件現れるが、うち10件は地名または金庾信のような名前である。したがって唯一の登場箇所は「第45「列伝」第5　貴山」である。

> 法師曰“佛戒有菩薩戒 其別有十 若等爲人臣子 恐不能堪 今有世俗五戒 一曰事君以忠 二曰事親以孝 三曰交友以信 四曰臨戰無退 五曰殺生有擇 若等 行之無忽”
>
> （下線筆者　三国史記WEBサイト）

隋に留学後帰国し、愛国的な貴族子弟の修養団体である花郎徒に世俗五戒をひろめたことでも有名な新羅僧・圓光法師に、英雄の貴山が一生の教訓をいただきたいと願う箇所である。圓光法師は、交友は信をもってなすべし、との教を説いている。儒教の影響が伺える箇所であるが、三国時代から統一新羅時代までは通信の概念は登場しないらしいことが分かる。

唐・新羅・渤海時代の日本との相互関係をしめす用語を詳細に分析した保科富士男の論文「古代日本の対外意識―相互関係をしめす用語から」(『前近代の日本と東アジア』田中健夫編、吉川弘文館、1995）で、国家間のうち上下関係に限定されない用語群として、隣好、善隣、交隣、修好、通好、和親、交通、通聘などが挙げられているが、通信の語は登場していない。

高麗時代についてまとめた歴史書はどうだろうか。高麗史を編年体でまとめた『高麗史節要』(1452年成立）の「巻之三十　辛禑元年〇大明 洪武八年」(1375年）に次の記述がある。

> 判典客寺事羅興儒，上書請行成日本，乃以興儒爲通信使遣之
>
> （下線筆者　民族文化推進院WEBサイト）

羅興儒という人物を日本に通信使として派遣した記録である。古朝鮮から高麗までの正史を編年体で記した『東史綱目』(1778年述）にもこの人物につい

ての記述がある。それによると、1281年の東征（弘安の役）以降、国交が切れていた日本と和親を結ぶために通信使、羅興儒を博多に送ったところ、スパイと思われ牢に入れられて死にそうになった。良柔という高麗僧が縄を解くように願い出、二人で和親をした。羅興儒は、本当は60歳程度だったが150歳だと言ったところ、倭人の見物人であふれかえり、讃までつくってくれた、という内容である。

このように、1375年の羅興儒の派遣が、通信使という言葉を正史にたどることができる最古の例であろう。また、この派遣は、倭寇の禁圧が目的だったといわれる。高麗王朝が通信使の名称を用いた理由を考察するには材料に乏しいが、両国間に国交を結び、秩序を回復することがねらいであった。そして信使でなく通信使という呼称を用いたことが特筆される。信使という言葉があるのにわざわざ通信使という言葉を使用したのはなぜだろうか。不本意ながら元に従わざるをえなかった東征（元寇）によって招いた不信感を回復したい、両国政府の間に信頼関係が打ち立てられれば倭寇を抑えることが可能になる、などの考えが働いたからであろうか。すなわち、信がないところに信の関係を打ちたてようとする意が込められていたのだろうか。

いずれにせよ、通信使という呼称の特異性を明らかにするためには、中国、韓国、日本の正史や古典ならびに関連史料を詳細かつ精緻に検討する必要があるだろう。ここでは、あくまで筆者の推測として、通信使という呼称が、高麗時代の発明であったという仮説を提示しておきたい。

朝鮮王朝政府による編年体の中央政務記録である『朝鮮王朝実録』になると、関連する記述は一気に増大する。通信使は334件、通信は実に1674件登場する。

目新しいのは通信官の語で、これが7件現れている。

①定宗 1巻 元年 5月 16日（乙酉） 1399年 「通信官朴惇之回自日本。日本國大將軍遣使來獻方物，發還被虜男女百餘人，上御正殿引見，命立四品班次行禮。」

②太宗 15巻 8年 3月 14日（癸亥） 1408年「癸亥/日本通信官朴和，推刷本國被擄人男女百餘以還。」

③太宗 25巻 13年 6月 2日（己酉） 1413年「日本志佐殿，使送客人，來獻土物。 政府啓:“志佐殿使送客人云:‘國人被擄在我土者頗多，遣人則可得刷來。’臣等以爲，通信官入送，推刷似便。”從之。」

④太宗 25巻 13年 6月 16日（癸亥） 1413年「癸亥/以前萬戶朴礎，爲日本通信官。 司諫院左司諫大夫玄孟仁等上疏曰:」

⑤太宗 26巻 13年 12月 1日（丙午） 1413年「遣通信官檢校工曹參議朴賁于日本。 令慶尙道都觀察使，給付虎豹皮十張、松子十石。」

⑥太宗 32巻 16年 7月 3日（壬辰） 1416年「命議政府、六曹，議送

通信官於日本便否。 志佐殿使人請遣通信官，上曰:“昔聞，彼有送還本土被擄人之語，備送唐艦二三艘，彼只送男女幷七人，我國墮其術中。今亦曰:‘有被擄人。’仍求通信官，未知所以。 宜語之曰:‘爾送被擄人，則我當備糧修艦以送，豈可未知多少，妄遣通信船乎? 爾還而報以被擄人多少，然後當遣通信官。’” 仍令政府、六曹議得，贊成朴信等皆曰:“上敎是矣。”」

⑦太宗 32巻 16年 7月 23日（壬子） 1416年「壬子/琉球國通信官前護軍李藝還。 推刷國人爲倭寇所擄，轉賣于琉球國者四十四人以來。」

（下線筆者　朝鮮王朝実録WEBサイト）

このように1399年の初出から1416年まで登場し、倭寇によって捕らえられた捕虜の送還などに関わっている。中尾宏もすでに通信官に着目している。

1397年にはやくも「通信官」の名がみられ、1429年には第一回の通信使が足利義教将軍の襲職祝賀と前前将軍足利義持の逝去を悼む使節として京都まで派遣されてきた。（仲尾宏『朝鮮通信使と壬申倭乱－日朝関係史論』明石書店、2000、あとがき）

通信官は、1375年の高麗王朝時の通信使を受けた呼称であろう。そして、その呼称から、捕虜送還のみが目的でなく、国交樹立、秩序回復が目指されていたことが伺われる。

朝鮮王朝時代に入り、通信使の初出は1414年である。

太宗 27巻 14年 2月 1日（乙巳）1414年「命停日本通信使朴賁之行。初以河崙建白，命賁爲通信使，齎國書禮物，行至慶尙道。 至是，政府啓曰:“賁旣稱疾不行。 今議者曰:‘其禮物令從事官齎去爲宜。’又有議曰:‘就付大護軍平道全，可達日本王所。’然皆未便，乞改命他人齎去。”成石璘曰:“日本賊船，歲寇上國，帝怒欲大擧雪恥，本國使臣所曾聞也。宜請聲罪，以敵所愾。 今縱未能，豈宜遣使以相交乎? 況曩者梁需至其境，書契禮物皆爲所掠，幾至於死，其王曾不治罪，其政可知。 雖不相交，亦何傷乎?” 上曰:“領議政之論甚是。” 遂停賁行。」

（下線筆者　同）

通信使を日本に行かせたが病気で中止となり、その代わりをいかにするかという議論がなされている。日本の賊船（倭寇）が中国に侵入するため中国の皇帝が怒って兵をおこそうとしているので日本に使いを送って罪をただすのがいい、という意見や、日本の政情は分からないという意見が見える。

このように朝鮮王朝で最初に通信使の名称が用いられたのは太宗のときであったが、以前には、先に挙げた通信官以外に、報聘使、回礼使といった名称も登場している。太宗を継いだ世宗のときに初めて通信使の呼称で実現に至り、1429年、1439年、1443年の三回にわたって京都まで往来した。後、2回計画されたがいずれも実現にいたっていない。ちなみに、足利幕府が朝鮮王朝に送った使節名称は日本国王使で、60回以上派遣されている。

その後、周知のごとく豊臣秀吉の時代に2回、江戸時代に3回の回答兼刷還使、9回の通信使が派遣された。

先行研究では、秀吉の朝鮮出兵で朝鮮通信使が途切れ、復活後3回目までは回答兼刷還使と呼称が変えられていたことに言及しているものが多く、高麗末期から朝鮮初期にかけてなぜ通信使の呼称が登場したのかを考察しているものは見当たらない。回答兼刷還使との比較のみに注目すれば、両国が安定的な関係にあるときにのみ通信使の呼称が用いられたかの印象を受けるが、高麗王朝末期には正式な国交がない状況でこの呼称が登場している。したがって、両国の関係が安定的か否かということよりも、理念としての通信の登場に注目するべきであると考える。

3「通信」の近代語への変容過程

今日では、近代語としての通信の意が圧倒的に普及し、もっぱらcorrespondenceやcommunicationを示す近代的意味に取って代わられてしまった。たとえば『日本大百科全書』（秋庭隆編、第15巻、小学館、1987）には7ページ以上にわたって通信衛星、通信システム、通信教育、通信販売、通信の秘密などcommunicationの意での通信の解説があり、この語が現代生活に用いられる頻度の高さを示しているが、前近代的の豊かな意味は失われてしまった。こうした変容はいかにして起きたのだろうか。

江戸時代末期の『英和対訳袖珍辞書』（1862）では、通信の語があてられているのは、correspondence と intelligence の二語であった。

『外来語の語源』（吉沢典男他編、角川書店、1979）によれば、communicationの訳語は『英和対訳袖珍辞書』で通達、消息、口達が用いられ、通信が当てられるのは、明治二十五年の『雙解　英和大辞典』（1892）となっている。通信社（明治31年）、通信員（明治37年）という新語がつくられるのもこの後である。

ここから推察すれば、今日、もっとも多く用いられている communication の意よりも、correspondence と intelligence の意が30年ほど早く、当初は国書を交わす外交使節としての通信使のイメージが投影されていたのではないかと思われる。

興味深いのは、開国の1859年から明治元年に及ぶ江戸幕府の外交文書集成が『通信全覧』（1867）『続通信全覧』（1879）と名づけられていることである。ここで用いられている通信の語は、対象は西欧諸国との外交を中心としていても、あきらかに、通信使、そして通信の国（徳川幕府は朝鮮と琉球をこう位置づけ、通商の国である清やオランダと区別した）の意が投影されている。おそらく、通信の語が correspondence や communication の訳語の意としてしか用いられなくなるまで、前近代と近代の用例が混在していたためと思われる。

しかしながら、通信を西洋語の訳語として受けとめ、信を通わすという原義が忘却されていくことと、朝鮮通信使という歴史文化的な事象それ自体が忘却されていくこととはおそらく同時並行的に起こったのだろう。なぜならば、朝鮮通信使を鮮明に思い描きながら、通信の語を西洋語の訳語としての意のみで使用することは不可能であるからだ。そして、逆に、『通信全覧』、『続通信全覧』のような表記そのものが今日から見れば奇異な印象を与えるようになってしまったのである。

おわりに：通信の現代的可能性

通信使、通信の語は各種電子文献検索サイトの活用により、中国の二十四史、十三経にはあまり見られず、『朝鮮王朝実録』では三千箇所以上で用いられていることが分かる。したがって、「通信」の語は、朝鮮王朝初期、日本における室町時代に通信使という名称が国王使節に用いられるようになって後、日本でも徐々に受け入れられ、江戸時代に一般的になっていったと推測される。ここから、朝鮮、琉球を「通信の国」、清とオランダを「通商の国」 と位置づけるような外交観も現れたのであろう。なお、近代語としての通信の用例がでてくるのは、江戸末期から明治にかけてである。

「通信」は、第一に、文字通り、信を通わす、つまり、まことを通わし言をたがえないことを表した。この信の分析は難しいが、儒教的な意味が強く人間と人間の関係を示している点に特徴がある。第二に、朝鮮国王と徳川将軍の関係を示していた。第三に、通信の信には礼としての型の側面があった。第四に、外交を意味する言葉にも転じていった。第五に、両国の良好な関係を示す言葉としてある一定の広がりをもった。

以上の意味理解は、現代の東アジアの共存を考える上でも示唆的である。すなわち、「通信」が一方的なものでなく対等関係の上に成り立つものであること。人間どうしのまことの関係としての信の意味を想起させること。心と心の関係に限定されず、外に現す型を求めるものであること、経済のみの関係とは一線を画していること等の点が注目される。

他方、中国との関係では「通信」をめぐる同等の史実が見出せないことが、

どのような性格をこの概念にもたらしているか、その局地性についても再考察の対象としなければならないだろう。

さて、筆者は、グローバル化する現代において宗教、文化の共存に不可欠な人間の経験を、インターレリジアス・エクスピアリアンス（inter-religious experience=IRE） と名づけている。このIREは、宗教の複数性に関わっている。宗教の複数性とは、①文字通り、自分をとりまく世界に複数の宗教が存在していること、②しかしながら、宗教という概念そのものが、そもそも近代に鋳琢された用語で、二元的・排他的パラダイムを人々と社会にもたらし宗教以外とされた領域（世俗世界、無宗教etc.）との間に、そして宗教・宗派間に常に過度の緊張を生じさせ、それでいて排他的領域確定が原理的に困難であるため、概念とパラダイムの揺らぎ（複数性）を人々に感ぜしめること、の二点をいう。

このIREの視角から、前近代東アジアに分け入っていくとき、宗教という近代概念とそのパラダイムを相対化し、新たな方向性を求めるための概念の宝庫が見出せる。「通信」もその一つである。近代語としての通信の呪縛から離れ、例えば、「信を通わす関係」、「信を通わす経験」などと噛み砕いてとらえれば、東アジアの交流を考えるうえで、重要な示唆を与えてくれるだろう。さらには、この「通信」 の関係を、多くの儒学者や仏僧が支えていた事実にも、新しい意義を見出すことができるだろう。

主要文献

矢内原忠雄『嘉信Ⅰ　〔通信・葡萄〕』みすず書房、1967.
申維翰『海游録』姜在彦訳、東洋文庫、1974.
田中健夫他校訂『朝鮮通交大紀』名著出版、1978.
李元植他『朝鮮通信使と日本人―江戸時代の日本と朝鮮』学生社、1992.
李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』講談社学術文庫、1992.
仲尾宏『朝鮮通信使と江戸時代の三都』明石書店、1993.
仲尾宏『朝鮮通信使の軌跡　増補・前近代の日本と朝鮮』明石書店、1993.
辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使：善隣と友好の記録』第1巻-第8巻、明石書店、1993-1996.
在日本韓国文化院編『日韓文化論　日韓文化の同質性と異質性』学生社、1994.
田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館、1995.
李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997.
仲尾宏『朝鮮通信使と壬申倭乱―日朝関係史論』明石書店、2000.
辛基秀・仲尾宏編著『図説　朝鮮通信使の旅』明石書店、2000.
姜在彦『朝鮮儒教の二千年』朝日新聞社、2001.

京都文化博物館・京都新聞社編・発行『こころの交流　朝鮮通信使　江戸時代から21世紀へのメッセージ』、2001.
仲尾宏・曺永禄編『朝鮮義僧・松雲大師と徳川家康』明石書店、2002.
辛基秀『新版　朝鮮通信使往来―江戸時代260年の平和と友好』明石書店、2002.
姜在彦『朝鮮通信使がみた日本』明石書店、2002.
高橋敬一他編『『交隣須知』本文及び索引』和泉書院、2003.
磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜　宗教・国家・神道』岩波書店、2003.
島薗進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ぺりかん社、2004.
吉田光男編『日韓中の交流―ひと・モノ・文化』山川出版社、2004.
日韓共通歴史教材制作チーム編『日韓共通歴史教材　朝鮮通信使―豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ』明石書店、2005.
濱田陽『共存の哲学　複数宗教からの思考形式』弘文堂、2005.

主要辞典

諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、1955.
吉沢典男他編『外来語の語源』角川書店、1979.
杉本つとむ編『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部、1981.
白川静『字統』平凡社、1984.
惣郷正明他編『明治のことば辞典』東京堂出版、1986.
秋庭隆編『日本大百科全書』第15巻、小学館、1987.
国史大辞典編集委員会『国史大辞典』９、吉川弘文館、1988.
古賀英彦編著『禅語辞典』思文閣、1991.
白川静　『字通』平凡社、1996.
倉石武四郎他編『岩波日中辞典』第二版、岩波書店、2001.
日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第二版、第7巻、小学館、2001.

WEBサイト

三国史記　http://www.koreandb.net/Sam/SamInfo.htm
民族文化推進院　http://www.minchu.or.kr/MAN/index.jsp
国史編纂委員会　http://www.history.go.kr/front/index.jsp
朝鮮王朝実録　http://sillok.history.go.kr/main/main.jsp
中央研究院漢籍電子文献（台湾）　http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/